The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 糸竹初心集の研究 : 近世邦楽史研究序説 |
| Author(s) | 馬淵, 卯三郎 |
| Citation | 大阪大学, 1991, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/37367 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

| | |
|---|---|
| 氏名・(本籍) | 馬淵卯三郎（まぶちうさぶろう） |
| 学位の種類 | 文学博士 |
| 学位記番号 | 第 9531 号 |
| 学位授与の日付 | 平成3年2月28日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当 |
| 学位論文題目 | **糸竹初心集の研究－近世邦楽史研究序説－** |
| 論文審査委員 | (主査) 教授 谷村 晃<br>(副査) 教授 山崎 正和　助教授 山口 修 |

## 論文内容の要旨

本論文は近世邦楽に関する公刊書として現在最古の文献である『糸竹初心集』（寛文4年，1664）を考察の対象の中心に捉えた研究である。中村宗三（生没年不詳）に帰せられるこの書は，従来から注目され，論じられることの多かった文献であるにもかかわらず，その記述内容にどこか不審な箇所があるために，これを全体として取り上げることがなかった。そのため疑惑の眼で見られる傾向があったし，その内容の理解に困惑させられる余り，そこに記譜されている曲が後続の時代に必ずしも連続するものではないと解されてきた。

他方『糸竹初心集』の記述が，一節切，箏，三味線の3領域に及んでいることも，総合的な把握を阻んできた一因となっている。横への関心が無く，狭い専門領域内の知見に留まり，縦方向でそれぞれに一応の筋が通っていれば，横相互間に矛盾があっても痛痒を感じないといったところが，一般に邦楽専門家に見られる，従って従来は，都合のよい所のつまみぐいだけで，この書物全体を真面目に取り上げ，その意味を見極めようとした研究が無かった。本研究では，成心を持たず，文字通り初心に帰ってこの書物を読むことに努めている。すなわち，現在の知見や常識に当てはめて，それに都合のよい訂正や解釈を加えるといったこれまでの研究に見られた賢しらだちを厳に戒めることによって，これまで気付かれなかった幾つかの問題点を明らかにすると同時に，日本音楽の研究を方法論的に前進させようとするものである。その意味で本研究は，近世邦楽史研究を真の学として成立させるための序説である。

本論文は四部に分けられている。第Ⅰ部＜はじめに＞では，従来の定説を批判し，新しい方法や概念を導入する必要性が述べられる。一般史においては既に使い古された方法である加上理論や，歴史叙述・説話等をその社会の意識の反映として理解する立場が，近世邦楽研究には欠けていることが指摘される。

また楽譜が音楽史の史料であり，楽譜の研究が音楽史研究の重要な手段であることが，邦楽の世界では未だ常識ではない。現行の演奏様式と形態を絶対視し，それによって歴史を構成し，叙述しようとする傾向が強いのである。その結果，伝承の聖域化と過度の演奏家重視が見られる。筆者はこの面から日本音楽の史的研究の前近代性，非科学性を鋭く批判しようとする。

さらに第Ⅰ部では，「作曲」即「即興演奏」であるような音楽行動という概念の導入の必要を説く。現行の演奏形態を作品に該当するものとして絶対視してきたことが，結果的に日本音楽研究を非歴史的なものとしてきたのであるから，演奏を個々の音楽行為に相対化する道を開いて，日本音楽のような規範譜の無い世界に歴史的解釈を加える可能性を探ることを，筆者は提案する。

筆者は，このような音楽行動のキーワードとして，division（細分装飾法）をあげる。ディヴィジョンその他の音楽行動は，作曲行為である面と即興演奏の技法であることの両面を持つ。その実体を明らかにすることは，日本音楽の作曲技法の歴史に不可欠であるとする。

また第Ⅰ部末の“日本音楽研究の諸問題”では『糸竹初心集』に記譜された旋律の音階の問題をめぐって，邦楽研究の現状を指摘し，本論文がこの現状打開の一助となることを期待している。

第Ⅱ部から本論文が始まる。第Ⅱ部は第Ⅰ章＜近代邦楽現存最古文献としての糸竹初心集＞，第Ⅱ章＜糸竹初心集成立の背景としての17世紀の音楽思想＞，第Ⅲ章＜糸竹初心集の成立＞，第Ⅳ章＜糸竹初心集の内容＞，第Ⅴ章＜糸竹初心集の評価＞の５章からなる。

まず『糸竹初心集』の諸本について略述し，これがロングセラーであったこと，これに刺激されて多くの音楽書が刊行されるようになったことが明らかにされる。また本書には雅楽への言及その他通俗書としては独特のものがあるので，その思想的背景を探る。論者は，17世紀中ごろの京都での儒者達の禮楽論や音楽実習がこの書の思想的背景であったとする。すなわち，熊沢蕃山（1619－1691），中村　斎（1629－1702），貝原益軒（1630－1714），武富咸亮（1637－1718）等と直接あるいは間接の関係があったとみる。

このような思想が演奏様式にどのように影響したかを，能の上演曲数等で調べた結果，音楽の実際が，社会の安定や幕府政治の儀礼，威厳重視に敏感で，世紀の前半で既に曲数減少，様式固定化の傾向を示していることが明らかとなる。17世紀に関する限り，禮楽論もまた，そのような社会の流れに沿ったものであったことが指摘される。

しかしこのような背景にも拘らず，この書には音楽の実際の重視があり。特に音感の意義を認める叙述があることを指摘し，こうした点もまた『糸竹初心集』成立に考慮されるべき一般の状況であるという。

特に第Ⅳ章では，『糸竹初心集』の内容を紹介し，その読み方の上で従来の定説の多くを批判し，筆者独自の着想による新しい読み方が提唱されている。そこでは『糸竹初心集』３巻が同じ構成であることに着目して，従来問題視されてきた中巻の調弦記事の意味を確定し，また類書『紙鳶』（貞享４年，1687）に詳細な検討から一節切のレパートリをプロパーの“手”と歌等にはっきり区別することにより，この楽器が半音を持つか持たないかという議論に終止符を打つことに成功している。

筑紫箏と三味線渡来説話についての議論は，この書におけるディヴィジョンと並ぶ大きな問題であるので，第Ⅲ部に譲られている。『糸竹初心集』に見られる記譜の訳譜は仮綴じ合本の参考資料として別

添されている。それを陰旋に訳した結果，ここに採譜された歌が，音進行レヴェルでは現在の日本人の平均的旋律嗜好に合致ものであることが示されている。

本論文の筆者は，奏法の説明が非常に現実的で合理的であるのが目立つが，この開明性が秘事とか流派等の権威性とないまぜになっているところに，『糸竹初心集』の著者の置かれていた思想的状況が反映されている。

第Ⅲ部＜近代邦楽史資料としての糸竹初心集の記述と資料解釈＞は，第Ⅰ章＜問題の提起－日本音楽研究上の問題点＞，第Ⅱ章＜三味線起源説話における加上＞，第Ⅲ章＜筑紫箏の系譜＞，第Ⅳ章＜尺八由来における加上と尺八文献の史料解釈＞の4章からなる。この第Ⅲ部は，多くの音楽書の歴史叙述の読み方に関する議論である。邦楽について文章を書く人達の間では，説話と歴史の境界が曖昧である。その典型例が永禄5年（1562）三味線渡来説である。これは，『糸竹初心集』に始まる三味線渡来説話を史実として証明しようとした後世の人々による加上作業の結果であるが，そもそも出発点が虚構であったとすれば，それを如何に精緻に立証してみても，それが歴史事実になるわけがない。

筆者は，『糸竹初心集』から18世紀までの各種の渡来記事を比較検討して，そこに見られる加上現象を明らかにする。ただそこから『糸竹初心集』自体が伝承の仕損じではなく，これもまた『色道大鏡』以下の諸説同様，当時の日本における三味線の存在の理由付けの最初の試みであったことに想到し，そのような説話には成立時の社会にそれを要求し，或いはその説を合理的であると認め得るような事情があったものと考える。たとえば琉球から渡来したという説が受け入れられやすいのは，琉球使節は音楽を披露すると言うのが，評判であったからであるとする。また，この説話が京都でなく江戸で成立していたら，堺に渡来したというような発想はありえなかったであろう。つまり，これは17世紀中ごろの京都の知識層の三味線についての意識が現象化したものであると筆者は考える。

筑紫箏については，世紀の前半で，筑紫箏が卑賤視されていたのに対し，『糸竹初心集』が箏の楽器としての品位を主張したのが，問題の出発点であるという。京都の儒者達の箏愛好，そして佐賀の武富咸亮が佐賀における箏演奏の情報を京都に傳えたことが相互にフィードバックし合い，これにさらに貝原益軒がかなり重要な役割を果たしたと見られる一連の作業があって，『琴曲妙』の序に見られる通りの筑紫箏の系譜ができあがったものと考える。筆者は，九州の箏だから筑紫箏，そしてこれが本物だという着想の発生，そしてそれまでの蔑視的な筑紫箏のイメージの否定といった筋書きを推論する。その上で，八橋検校の箏を結局はその筑紫箏であると認めてしまうのが『糸竹初心集』から『琴曲妙』に到るまでの経過であると考える。しかし，それとは別に，筑紫を称さないで，単に琴の組という言い方を守る系譜があった。従って筑紫箏の問題は，元々は上に挙げた人々の間だけの関心事であったはずであるというのが，筆者の主張である。なお尺八の由来および一節切と尺八の関係についても俗説の史実でないことが論じられる。

第Ⅳ部＜細分装飾法＞では，邦楽の創作の実際，即ち即興イコール作曲であるような邦楽の演奏慣習が論じられる。それは『糸竹初心集』に簡単ながらそのような演奏の技法があったことが，文字と記譜で記されているのを根拠にして論じられる。もちろんそこに記譜されたものは原則として，ある段階で定着形であり，あるいはオリジナルの簡素な旋律である。行為自体の流動性を楽譜によって実証するこ

とは極めて困難なことであるが,『糸竹初心集』の所収の「すががき」のディヴィジョンとしての「六段」の発見を機に,『糸竹初心集』の「すががき」と関連するいくつかの邦楽曲の比較構造分析を通して,流動的,不定的な近世邦楽の演奏の自由さの実体を的確に把握する道を切り拓いたものといえるであろう。

本文,引用文献　計　190ページ（1ページ：40字×30行)。400字詰原稿用紙換算　約570枚。

参考資料,仮綴じ合本　3冊

## 論文審査の結果の要旨

本論文は,近世邦楽に関する最古の文献の一つである『糸竹初心集』を,素直に読み,その全容を見極めようとした極めて意欲的な研究である。その成立,社会的背景,またそこに記された楽譜等全ての面にわたって徹底的に読み直すことによって,今日まで気付かれなかった問題,さらには説話と史実の境界を曖昧にさせておく邦楽研究家の美風のために見えなくされてきた問題に思い切ってメスをいれることによって,日本音楽研究の世界に新しい関心と方法を開き,日本音楽研究を学問として誠実なものにし,かつそのレヴェル・アップをはかろうとしたものとして高く評価できる。

評価すべき第1点は,必ずしも信用の置けないものが多い日本音楽に関する文字資料を史料として解釈するのに,加上と叙述の構造の比較分析を方法として用いたことにある。それは,日本音楽研究にとっては画期的なことで,本研究の独創性の大半はこの点にかかっている。その意味で,本論文は日本音楽の研究を,特に方法論的に前進させるところ大なるものがあると思われるが,そのためには邦楽の研究者達にこうした研究を理解する能力と姿勢があることが大前提であるといわなければならない。

評価すべき第2の点は,研究対象としてまともに楽譜に取り組んだ点,日本音楽の研究として極めて独創的なことといわなければならない。それは非常に奇異に聞こえるかも知れないが,従来の日本音楽研究では,実際に鳴り響いた音の記録としての楽譜をそのようなものとして取り上げる姿勢に欠けていた。研究のなかで楽譜が取り上げられても,そこから音楽が聞こえてくることはなかった。日本音楽の研究が日本史や国文学の研究としてではなく,音楽の研究として学問的成果を挙げ得るためには,音そのものが,そしてまた音を奏でる人間の思考をそのものが問われなければならない。本論文では,『糸竹初心集』の事例を手がかりにして日本人の音に対する感性,時代と社会の中で鳴り響いてきた音が追究されているのである。この意味で,本研究はまた今後の日本音楽研究におけるひとつのモデルとなるであろう。

評価すべき第3の点は,方法論的に的確な史料批判と,楽譜を手がかりとした流動的音楽行動の比較分析によって,これまで秘事として暗闇に包まれていた近世邦楽史に然るべき入り口を見いだしたことにある。この方向で日本音楽の研究が推進されることによってはじめて,日本音楽研究がが単なる専門知識の収集に終始することなく,人文科学に貢献する重要な研究分野と成り得るものと思われる。

評価すべき第4の点は,本研究のために収集された資料の豊富さとその読みの深さである。そうした

読みの深さはしばしば，フィールドワークによる音の実地体験と実地検証の中で醸成され，思索され，そして理論付けられているので，それは決して偶然の思いつきや牽強付会ではない。

以上本論文の卓越した諸点を列挙したが，その一方で本論文には問題点も認められる。まず収集された資料が余りにも多く，その全てが十分に使いこなせていない恨みがある。もっとも副題に<近代邦楽史研究序説>とあるように，これは同時代の史料のみによって17世紀の音楽を叙述するという構想の基礎となる出発点と考えるならば，この豊富な資料の存在は今後の研究のための貴重な財産であるといえるかも知れない。また筑紫の系譜，三味線渡来の歴史的事実，一節切と尺八の関係等の問題については，従来の説が史的事実に裏付けられた根拠のあるものでないことが明らかになっただけで，その先，これらの問題をどのように展開するのかは必ずしも明らかではない。次に問題なのは第Ⅳ部である。第Ⅲ部までの論旨の重要な支えとなるべき音の分析の章が必ずしも最善の状態に整理，論述されていないので，説得力に欠けるのは真に残念である。それに第Ⅳ部を読むために別添された参考資料も説明不足のために必ずしも十分参考資料としての役を果していない。しかしながらこうした欠点にも拘らず，本論文に一貫して流れる主張の独創性，学的批判精神およびその真摯な研究姿勢には傾聴に値するものがある。

以上のように，本論文は従来のこの分野の研究の水準を越えるのみならず，それに新しい関心と方法を開き，日本音楽研究の大幅なレヴェル・アップを期待させる注目すべき論考である。文学博士（論文）の学位申請論文として十分の価値を有するものと認定する。